読売新聞 タコ部屋潜入記

1969年

府警で防犯を担当していた清水が、大阪・西成区の日雇労働者を装って私設職安へ潜入したのもこの年（昭39）の五月のことだった。

当時、筆ヶ崎といわれた一帯には約四千五百人の日雇い労働者がいた。所からの開発ラッシュで、完全な売り手市場だった。そこにつけ込んだのが暴力団で、手配師を送り込み、相場（日当平均千円）よりニー三割高い賃金を払うとだまして飯場へあっせん、手数料を賃金源にしていた。また、組関係者が飯場を経営、賃金をピンハネしたり、支払いを遅延・踏倒したりして強制労働させるケースも多かった。

清水は三十八年の吉展ちゃん誘かい事件のとき、犯人を求めてドヤに二週間近く、潜入したことがあり「この目で暴力飯場をたしかめたい」と企画、西成署に話を持ち込んだ。

暴力団担当刑事二人とともに、ヨレヨレのジャンパーに地下タビ、首にタオルを巻いて労働者風に変装し、潜入はまずドヤから。夜、十人ほどの相部屋で雑談しながら賃金、仕事、飯場のことなどを聞き出し、手帳知識を仕入れた。翌朝八時、労働福祉センターのバスが引き揚げるのを待っていたかのように黒シャツ、黒ズボンの男が数人。「にいちゃん、えー飯場、世話しようか」。清水ら三

人は他の労働者十人ほどと一緒に白タクと南海電車を乗り継ぎ和歌山市内の飯場へ。

「親方」と呼ばれる黒シャツに菱形のバッジをつけた男に「仕事はあるだけやる、のんびりやってくれ」と言われ、まず食事・酒が一本ずつついた。なかなか待遇がええやないか、と思ったが、これが間違いだった。酒はもちろん、食事、寝具、軽便カミソリ、タオル、下着とすべて有料。日当千百円ということだったが、月末に手にする金は一日二百円ぐらいにしかならないとわかった。しかも、賃金は五日間ゴ凍結。され、途中でやめると二千円天引きされる。寝床がまたひどく、板けぶとんから線がはみ出し、異臭が鼻をついた。

翌日早朝、奥和歌の防波堤工事現場で、コールタールを船で沖合へ運ぶ作業。清水はカメラをジャンパーにしのばせ、菱形バッジたちの目を盗んでは飯場の中や作業現場でシャッターを切った。その夜、飯場が寝静まってから、三人はそっと抜け出し、「コラーッ」という声に追われながら夢中で走った。

この潜入でヤミ手配組織の確証をつかんだ西成署は二十一日朝、制私服警官五十人を動員して和歌山市内の飯場などを職安法違反の疑いで捜査、七人を逮捕。一味のピンハネ額は五百万円以上になっていた。拳銃はピストル、短刀なども押収。